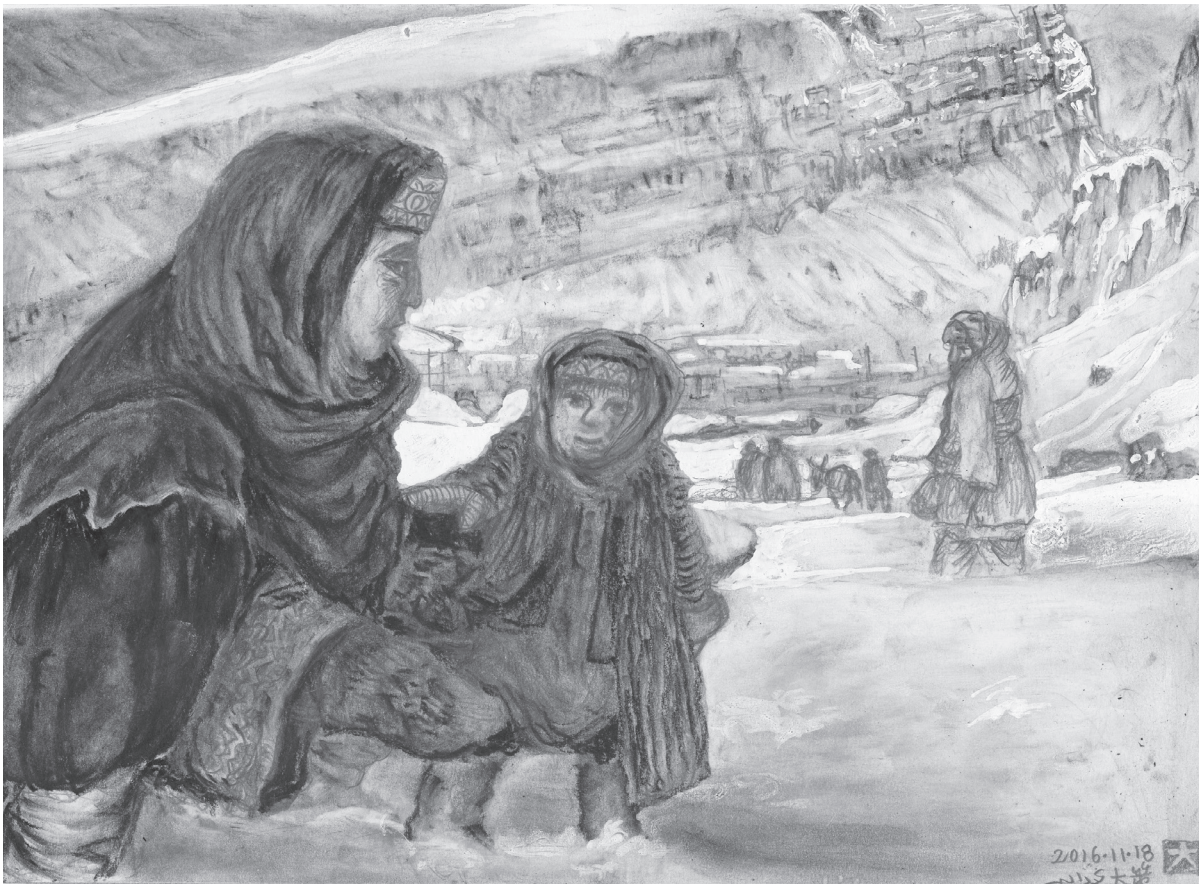
Peshawar-kai

ペシャワール会報

ペシャワール会事務局
〒810-0023　福岡市中央区警固
2-1-17　ハイツみかげ803号
TEL　092（731）2372
FAX　092（731）2373

No.130
2016年12月7日

〈URL〉http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/　〈E-mail〉peshawar@kkh.biglobe.ne.jp



表紙絵　ドゥアウメフザリンへ／画・甲斐大策

飢饉がささやかれる中、送還難民流入	中村　哲
ダラエヌール診療所を24時間体制で支える	モハマッド・アーベット
OBたちの足跡の上に自分もあることを自覚	浦田菖平
◉カラー特集　ミラーン堰完工そしてマルワリードⅡ着工へ	

ペシャワール会は、1983年9月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々への理解を深めていきたいと願っています。

飢饉がささやかれる中、送還難民流入

――予定を前倒しで「緑の大地計画」完遂急ぐ

ＰＭＳ（平和医療団・日本）総院長／ペシャワール会現地代表　中村　哲

二〇〇〇年なみの異常気象

みなさん、お元気でしょうか。当地は急に冷え込み始め、川沿いの水は冷たいです。

相も変わらず河の仕事ですが、今年は特別に寒風が骨身に沁みます。

異常気象です。昨冬は降雪量が非常に少なく、春先に少し降ったものの、洪水となって消えてしまいました。五月から現在までほとんど雨がありません。そのため、川の水が極端に少なくなり、小麦の播種ができない地域が増えています。既に一〇月には、厳冬期並みの低水位を記録し、天水に頼る地域の収穫はことごとく壊滅、大河川沿いでは取水できず、飢饉がささやかれています。大干ばつが襲った二〇〇〇年の状態に酷似しています。

難民であふれるジャララバード

悪いことに、パキスタンから送還される難民の問題があります。その数、一〇〇万から一五〇万人と言われ、トルハム国境だけで毎日七千家族が送還されると伝えられました。一〇月、アフガン政府は、これら難民をいったんジャララバードに留め置く方針を打ち出しました。これに加え、北部のクナール州やナンガラハル州南部・スピンガル山麓からの国内避難民があります。

ジャララバード市内は人であふれています。難民キャンプから買物にくる人、職を求める人、知り合いを訪ねる人、物乞いをする人、借家を探す人、とりあえず動き回る人、これらを客にする露天商やリキシャが加わり、信じられないような雑踏が出来あがっています。

雪が薄く山肌が見える、積雪のケシュマンド山脈。しめきり堤工事現場から撮影（2016年2月16日）

市の近郊、特に北部のベスード、シェイワ、カマ郡は、たちまち人口密集地帯となってしまいました。川沿いやガンベリ沙漠でも、避難民のテントが林立し始めています。

難民流入で治安が悪くなった訳ではありませんが、無政府状態です。麻薬生産は、「アフガン全体で約四割増加」と伝えられ、少しお金と教育がある都会の若者は、祖国を見捨て、欧米諸国へ逃れていきます。

ＰＭＳでは、この動きを危機的にとらえ、予定を前倒しで「緑の大地計画」完遂を急ぎ始めています。新たに着工したミラーン堰対岸地域（マルワリードⅡ）だけでなく、計画が延期されてきたカシコート延長水路（九・八㎞）、バルカシコート堰らの早期実現を目指しています（p.4写真）。

難民が帰り、暮らせる故郷

しかし、悲惨なことばかりでもありません。現在の作業地（ミラーン対岸地域）では、着々と取水堰と用水路の建設が進められ、八〇〇㌶の農地回復を目指し、多くの村民に安堵感を与えています。多くの難民が帰農し始めました。

「いつでも帰れて、暮らせる故郷！」

この状況の中では、それが贅沢と思えるほど貴重なものです。パキスタンから戻った難民たちは、口をそろえて感謝します。

同地の四ヵ村（コーティ、タラーン、カチャレイ、ベラ）の三万人は、ＰＭＳに将来を託し、強い協力態勢が築かれています。特に、今冬に取水堰の仮工事が成れば、長い間苦しめられてきた洪水の危険が遠のき、耕作地が倍増、安定した農業が全域で保障されるからです。

この作業地の対岸では、マルワリード用水路の最後の仕上げとも言える工事が行われています。全長一・五㎞の主幹排水路で、年内に開通予定です。既に数百ヘクタールの湿害地が一掃され、小麦の作付けが保障されています。足かけ六年の難工事でしたが、決着が近づいています。完成後に詳細を報告します。

堰板方式の砂吐きが威力

去る一〇月に竣工したミラーン堰は、異常気象による渇水で、竣工直後に取水困難に陥りました。しかし、堰板方式の砂吐きが絶大な威力を発揮しました。わずか二段の堰板（四〇㎝）でたちまち水位を回復、流域一一〇〇㌶が隈なく潤された上、新たに同流域に加わったタプー（五〇〇㌶）にも行きわたったのです。これで、冬小麦の収穫に不安なく、ミラーン流域とタプー流域の水争いは消滅しました。見かけは野暮ったいけれど、これは紛れもなく「可動堰」

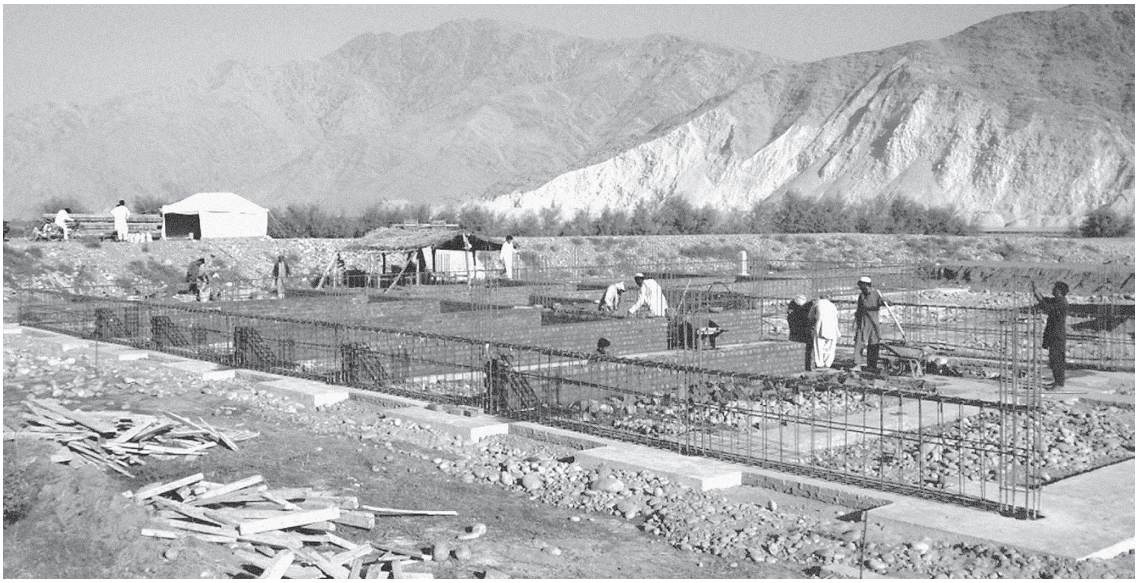
ガンベリ沙漠に難民たちの小屋が見える。手前はPMSのガンベリ農場（2016年10月25日）

ＰＭＳが用水路建設を始める前は、干ばつ地でもよく育つ写真のようなケシ畑が多く見られた。用水路開通後は消滅し、米や麦が作られている。

カシコート既存用水路。堰からの取水可能量に対して既存水路の容量は半分以下。外壁の傾斜が急で幅も狭いので拡張工事により容量が増大し、飛躍的に農業生産は上がる（2013年7月8日）

洪水で崩壊したコンクリート突堤のバルカシコート既存用水路。突堤の先端が洗掘され水が取水口に流れなくなり、村民による堰上げの跡が見られる（2015年10月14日）

ミラーン堰完工式典で「パキスタンからの強制帰還難民があふれ、南部では戦火がやまず、北部ではクナール州からの干ばつ避難民、外国団体は引き上げ、我々は最悪の時を過ごしている。この中で、アフガン人自らの手で、自らの方法で、自らの命のために力を尽くす、そのことが偉大なのだ」と強調した中村医師（2016年10月3日）



ミラーン堰の隣に建設中の人材育成訓練校（ＦＡＯ共同事業）

用水路現場付近の村の子供たち

（p.7写真下）、この時ばかりは、改めて先人の知恵に感謝しました。異常低水位にも拘わらず、PMSの建設した八ヵ所の取水堰・用水路は、全て正常に機能し、住民に動揺はありません。

二万本のオレンジに希望

ガンベリ農場のオレンジ園では、五年目にして、やっと〝結果〟が始まりました。「二万本分が出荷できるようになれば、さぞ壮観」と、農業部は胸を膨らませています。

アフガニスタンといえば、爆破事件、治安悪化、米軍の誤爆、政局の混乱、テロ対策、国際支援の失敗、欧州への「難民」―等々の報道ばかりで、このところ辟易しています。大きな元凶である旱魃と飢餓は、余り問題になりません。きっと私たちは、報道で合成される世界とは別のところに居ます。

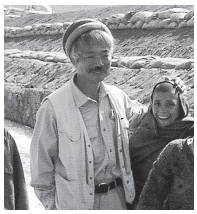
飢えた人々に必要なのは、政治議論やテロ対策ではなく、パンと水です。私たちの仕事が、行き場もなく途方に暮れる人々にとって、一つの希望となり、励ましを与え続けることを祈ります。

ここで目にする水路も堰も、豊かな実りも、全て良心的協力の結晶です。それがどれだけ人々に安らぎを与えているか、貧しい言葉では伝えきれません。日本も決して明るい世相ではありませんが、ほとんど見捨てられた人々への、変わらぬ祈りと温かいご関心に感謝します。

事業は世代から世代へ、氷河の水が絶えるまで続けられます。現地PMS一同もまた、祈りを合わせ、この仕事を自らの励みとし、更に意気軒昂です。

良いクリスマスと新年をお迎え下さい。

二〇一六年一二月
ジャララバードにて



中村（なかむら）　哲（てつ）…九州大学医学部卒。専門＝神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病院勤務を経て、一九八四年パキスタン・カイバル・パクトゥンクワ州（旧北西辺境州）の州都ペシャワールに赴任。ハンセン病コントロール計画を柱にした、貧困層の診療に携る。八六年からはアフガン難民のための事業を設立し、アフガン北東山岳部に三つの診療所を開設。九八年には基地病院PMSをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も開始した。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大干（かん）ばつ対策のための水源確保（井戸掘り・カレーズの復旧。作業地千六百ヵ所以上）事業を実践。さらに〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を開始、〇三年三月からは灌漑水利計画に着手し、一〇年三月全長約二五キロが開通した。ダラエヌール診療所の年間診療数四万二七一二人（二〇一五年度）。

【カラー特集】ミラーン堰完工そしてマルワリードⅡ着工へ

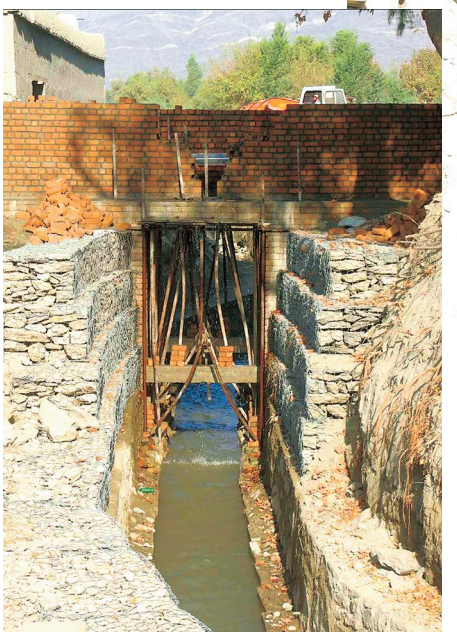
ミラーン堰完工の祝賀。ナンガラハル州の副知事以下、関係省庁役人、JICAジャララバード事務所責任者、ベスード郡長や自治会主要メンバー、シェイワ郡長、ＦＡＯジャララバード事務所責任者が列席（2016年10月3日）

ミラーン堰で初めて試みた堰板方式の河道堰（砂吐き、洪水吐き）。10月下旬、河水位の異常減少で取水不可能に陥ったが堰板を挿入し取水を回復した（2016年11月14日）

10月1日着工前のマルワリードⅡ堰、用水路建設地であるコーティ、タラーン、カチャレイ、ベラ各村代表とPMSの合同協議。1992年、当地でPMSがマラリア診療を行ったことは住民の記憶に新しい（2016年9月22日）

マルワリードⅡの取水堰建設予定地（カチャレイ村）。手前に岩盤が張り出し、対岸に長大な（長径約950m）単砂州がある。対岸はシギ村落群が広がる（2016年9月22日）

建設中のマルワリードⅡ取水門（右）、土砂吐き（左）（2016年10月）



上：主幹排水路は1200m地点に達した（2016年10月14日）
同所を横断するシギ用水路の水道橋を撤去し現在新設中（左、2016年11月14日）

上／右：PMS ガンベリ農場 オレンジ園（2016年10月25日）

シェイワ村の日曜市場　野菜がたくさん並ぶようになった

◎現地スタッフからの便り

ダラエヌール診療所を二四時間体制で支える

ＰＭＳダラエヌール診療所・看護師
モハマッド・アーベット

戦禍をのがれてペシャワールへ

私はアフガニスタンのパンジシェール出身のモハマッド・アーベットと申します。一九四六年生まれで、三人の娘と五人の息子がおります。

一九八〇年に高校を卒業した後、フランス人の医師から看護のトレーニングを六年間受け、その後同郷のアフマッドシャー・マスード司令官の元で衛生兵として働きました（注：当時は旧ソ連の侵攻時代）。ソ連とアフガニスタンの戦争（一九七八年～八九年）で父親と兄、甥や姪たちを失い、激化する戦争の中、家族の安全が危ぶまれたため、一九八六年、私は家族を連れ隣国のパキスタンのペシャワールへ避難しました。

ペシャワールでは、フランス人が経営するＭＲＣＡ病院で外科のトレーニングを受けました。そしてアメリカ系のトリナガルジャジのフリーダム・メディスン病院で一年ほど働いておりましたが、一九八七年に同郷のドクターシャワリから日本人医師がハンセン病の診療をしているＡＬＳ（アフガン・レプロシー・サービス＝ＰＭＳの前身）で働かないかと声を掛けられました。

ＡＬＳは開設して間もないころで、ドクターナカムラの他にドクターシャワリ、事務員一名、運転手一名、料理人一名の小さな医療チームでしたが、皆で力を合わせて働きました。ドクターナカムラはペシャワールミッション病院のハンセン病棟の責任者でもあり、ＡＬＳでは主にアフガン人のハンセン病診療に力を注ぎました。

看護師長としてナースを育成

アフガニスタン国内ではロシア（旧ソ連）との戦争が日毎に激しさを増し、数百万の人々がパキスタンへ移住してきました。殆どの難民が経済的にも保健衛生についても大きな問題を抱えていました。

ペシャワールはアフガニスタンとの国境に近い町でしたので難民キャンプもあちらこちらに出来ました。

ドクターナカムラはＡＬＳをＪＡＭＳ（ジャパン・アフガン・メディカルサービス）と名称を変え、ドクターや検査技師、ナースを増やし院内でトレーニングコースも開きながら、難民キャンプでの一般診療を始めました。私は看護師長としてアフガン人ナースを育成しました。それでもペシャワールから遠い地域に移住（難民化）する膨大な人々は同様に医療の問題を抱えたままで、ＪＡＭＳに来院するのは難しいことで

アフガニスタンの国内診療所開設前の調査に同行するアーベット看護師（左から2人目、1980年代後半）

した。ドクターナカムラはパキスタン北西のディール県テメルガルに診療所を開き、ハンセン病患者への投薬所も置きました。ここを拠点に更に北部の難民キャンプの診療も充実させていきました。

PMS基地病院建設まで

一九八〇年代後半、旧ソ連がアフガニスタンから撤退し、一〇年もの長い戦争で荒廃した母国へ難民が帰還しはじめると、ドクターナカムラはナンガラハル州ダラエヌール、クナール州ダラエピーチ、そしてヌーリスタン州のダラエワマに次々と診療所を開き、ハンセン病や一般の診療をしました。

一九九四年には、ドクターナカムラは活動の拠点をミッション病院から独自のハンセン病治療センター（PLS＝ペシャワール・レプロシー・サービス）に移し、ハンセン病が多く、かつ医療過疎地でもあるパキスタン北西部のチトラール県ラシュツやコーヒスタンに診療所を置き医療活動をしました。

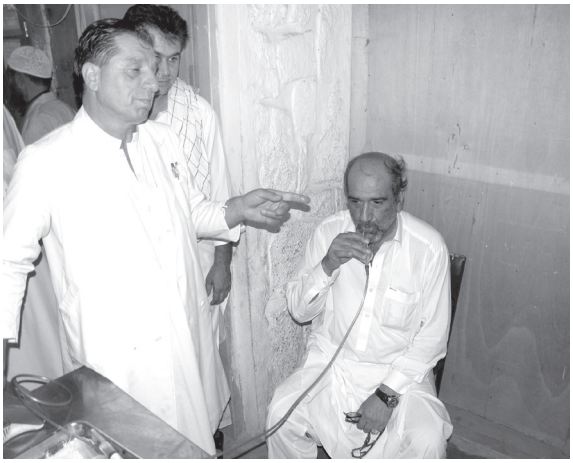
私はペシャワールの病院でドクターナカムラにハンセン病患者のいろいろな手術を学びました。パキスタン北西部やアフガニスタン国内の診療所開設の調査から準備、開設までいつもドクターナカムラと行動を共にしていましたので、旅の途中での緊急手術等もあり、たくさんの技術を身につけることができました。ドクターナカムラも私の仕事を必要として下さいました。

ペシャワールのJAMSとPLSはどちらも借家で診療活動をしていましたが、ドクターナカムラは、ペシャワールに土地を確保し大きな病院を建設しました。一九九八年に完成しJAMとPLSは合併されPMS基地病院（ペシャワール会メディカルサービス＝現在のピース・ジャパン・メディカルサービス）となりました。

PMSではアフガン人、日本人、パキスタン人の職員が、患者のために協力し合い誠実にまた友好的な環境のなかで共に働きました。私はシスターフジタの協力で更に看護学や技術を学びました。

ダラエヌール診療所へ

二〇〇一年に始まったタリバンと国際軍との戦争でアフガニスタンとパキスタン両国の治安が悪化してゆきました。二〇〇八年にPMSの農業事業で働いていた日本人スタッフのミスターイトウが武装集団の犠牲となり、ドクターナカムラ以外の多くの日本人は日本へ帰りました。私はドクターナカムラとシスターフジタの指示でダラエヌール診療所へ異動となり、パキスタンからアフガニスタンへ移り住み現在に至ります。


気管支炎を患ったドクタージアに吸入療法を勧めるアーベット看護師（2016年7月）

診療所では、多種の仕事がありナースの仕事の他に事務作業も兼ねる時があります。チームワークが良く二四時間体制で（夜間は急患のみの診療―幼小児の発熱が多い）地域の人々のために診療をしているので、この診療所があることを住民たちはとても喜んでおり、私たちも彼らによって幸せを感じております。

診療所には多くの栄養失調や結核の患者

が来院しています。このことから、人々がいかに経済的問題を抱えているのかが分かります。

私は副院長のドクタージアに相談し、地域の人々の協力を得て、栄養失調患者と結核患者のためにそれぞれ部屋を準備しました。ここで患者たちは登録され、回復するまで薬物療法や食糧を継続的に受け取れるようにしています。

他にも診療所では、内科、小外科処置、ワクチン、助産師による妊産婦への保健指導などで人々に貢献しています。

これまで申し上げたような仕事の中で地域住民との問題や診療所内での問題が起こる時がありましたが、地域の代表者とは話し合いの機会を設け診療所の考えを説明し理解をしてもらい、診療所内では医療従事者だけではなく事務、門衛、キッチンの職員たちと各セクションの作業がよりよく行われるよう定期的に運営会議をもち、幸い何とか解決してきました。

診療所での私たちの取り組みの近況を後日写真で日本へお伝えします。

以上の診療活動に加え、井戸掘削や灌漑用水路建設、農業復旧、学校建設等、我が国の人々を助け支えて下さる日本の人々に感謝しております。ドクターナカムラやシスターフジタ、これまでPMSに来て我々と共に働いてくれた多くの日本の方々が貴重な時間を我々アフガニスタンの人々のために費やして下さった事に心から感謝致します。

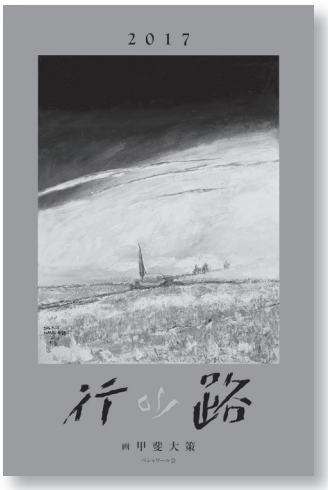
2017年カレンダー

「行　路」

画・甲斐大策

同封のハガキでご注文ください

A2判変形（画・7点）
定価1500円（税・送料込）



今年も恒例のカレンダーを制作しました。部数に限りがありますのでお早めにご注文下さい（ご友人・知人へのプレゼント発送も承ります）。

※代金は後払い。払込用紙を同封します

▼寄付をしてくださる皆さまへ

＊当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、お願いいたします。

▼事務局移転のおしらせ

＊二〇一五年五月に移転しました。
新住所：〒八一〇―〇〇二三　福岡市中央区警固二―一―一七　ハイツみかげ八〇三号（電話・FAXは変わりません）

▼未使用の切手、書き損じハガキ（官製ハガキ・年賀ハガキ）をお送り下さい

＊引き出しの中などに眠っているものをお送りいただければ幸いです。会報発送等に使わせていただき大変助かっております。なお、外国の切手は取り扱っておりません。

▼現地活動を紹介するパンフレットをお送りします

＊ペシャワール会の活動をご紹介されるときにお使いいただけるものです（払込用紙がついています）。ご希望の方は遠慮なく事務局にお申し越し下さい。なお、パンフレット、会報等は受け取る意思のある方への配布を原則としております（ポスティング等は行わないこととしております）。パンフレットはA3変形を四折りしたもので、長形の定形封筒に入るカラー版です。

◎ワーカー通信

OBたちの足跡の上に 自分もあることを自覚

ペシャワール会事務局・PMS支援室・現地連絡員
浦田菖平

ひたすら挨拶

仁川空港を出発してから乗り継ぎを含め二四時間。もう周りにはアラブ人以外の顔は見当たらない。特有の香りと熱気に包まれ、アフガンに足を下ろす。道にはジェット機や戦車のモニュメント。迷彩服を着た検問番。戦乱の国にとうとう来たのだなと実感した。

初のアフガン渡航は真夏ということもあり滞在期間は一週間であった。今回の目的は大きな会計の仕事二つと現地職員と直接コミュニケーションをとること。これから仕事をしていくに当たって直接会話したことがあるのとないのとでは、だいぶ感じ方が違うからだ。

日本と違うことの一つが挨拶である。日本では「こんにちは」一つだけで済むが、現地では「こんにちは」「元気ですか」「調子はどうですか」「気分は良いですか」「家族はお元気ですか」……と立て続けに何度も尋ねる。現地の文化はできるだけ敵を作らないようにする文化で、敵意を見せないためにもできるだけ挨拶は多い方がよく、相手のことを考えていますよと示すことが大切らしい。パシュトゥー語を勉強中の我々は、この挨拶は日本にいる間にできるようになっていた。コミュニケーションをとるにはひたすら挨拶をする他に手はない。朝礼、廊下ですれ違ったとき、終礼でできるだけ挨拶をするように心がけた。

風景の壮大さが違う

一日だけ現地の各所を回らせてもらうことができた。全て話すときりがないのだが、ガンベリタワーから見下ろす風景は綺麗な緑であった。写真でよく見た風景だが、壮大さが違う。見渡す限り木々が立ち並び、奥のガズ林の向こうには死の谷と呼ばれるガンベリ沙漠の砂丘が見える。緑の中にはいくつもの水路が張り巡らされていて静かに水が渡っていく。自分が立っている場所も以前は沙漠だったとは想像もできない。さらにここの緑の中に入ると空気が変わるのが分かる。外は砂の舞う乾いた空気であったのが、まるで日本の田舎の田んぼの中にいるような優しい空気になる。ジャララバードの街の喧騒は遠ざかり、穏やかで戦争とは程遠いような安らぎのある場所だった。

今回の渡航で感じたことの一つはPMS・ペシャワール会の歴史である。職員からは誰々は元気にしているか、一緒に働いているのか、君は誰々にそっくりだなどとOBさんの名前が次々と出てくる。宿舎には日本語で整理されたものがあり、大抵の

ジア医師（中央）とマドラサを視察中の浦田ワーカー（右、2016年7月18日）

ものは探せばある。多くの日本人ワーカーが生活してきた跡だ。ワーカーとしての先輩方の活動が引き継がれて今に至り、自分もその一人となる。そう思うとある意味でのプレッシャーを感じる。

診療所のニーズに喜び

また今回ダラエヌール診療所にも行くことができた。診療所は大人から子供まで多くの患者が診察を待っていた。街からだいぶ離れて渓谷のなかにある診療所だが、どれだけのニーズがあるのか一目でわかる。その光景を見て何か嬉しくなった自分がいた。それはPMS・ペシャワール会の人間だからというわけではなく、世の中が少しでも良くなればいいなと思う一人の人間として、寄付で成り立つこの診療所が設立して二五年経ってもこのニーズがあるということに対してである。国際協力の現場としてよく耳にするのが、施設を建てても働く人がいないだとか、資金の多くは賄賂に消えているとか、あまり良いニュースは聞かない。偽善者、自己満足と誹られることもある。しかしこの光景を目のあたりにして可能性というか、この気持ちは間違っていなかったんだと安堵することから喜びがあふれてきたのだと思う。

今回、自分は現地をサポートする気持ちで向かった。しかし、アフガン人職員たちには、特に言語の面に関して大変お世話になり、頼ってばかりであった。まだまだ青いなと自分の経験の浅さを実感した次第である。

現地の人、応援して下さる人、家族友人のためにも尽力して幹を大きくしていきたい。

医者、用水路を拓く
アフガンの大地から世界の虚構に挑む
中村哲　【6刷】1800円
辺境で診る辺境から見る【5刷】1800円
医者 井戸を掘る【12刷】1800円
医は国境を越えて【7刷】2000円
ダラエ・ヌールへの道【5刷】2000円
ペシャワールにて【8刷】1800円

アフガン農業支援奮闘記
高橋修・編著　2500円

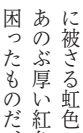
聖愚者の物語
甲斐大策　1800円

石風社　福岡市中央区渡辺通2-3-24
電話092(714)4838

人は愛するに足り、真心は信ずるに足る アフガンとの約束
中村哲／澤地久枝(聞き手)　2000円
岩波書店　東京都千代田区一ツ橋2-5-5
電話03(5210)4000

天、共に在り アフガニスタン三十年の闘い
中村哲　1600円
NHK出版　東京都渋谷区宇田川町41-1
電話03(3464)7311

価格はすべて本体価格(税別)です

アフガニスタン DVD VIDEO
用水路が運ぶ 恵みと平和

朗読　吉永小百合
3000円（税＋送料込）

サファル・バハェル！（良い旅を）――――27

ドゥアウメフザリンへ

甲斐大策

足下の雪が堅い音を立て始めていた。

「エイ、ズードコー（おい、急げ）！」

ザルディは妻子に声を掛け、下方のドゥアウメフザリン[1]とその背後のカモネルスタム山[2]を見遣る。東方のサラング峠に車道が開通して六十年余、経ドゥアウの旧道は死んだ。

ペルシャ、マケドニア、マウリヤ、クシャン、グプタ、そしてイスラム、モンゴルその他数々の王朝や民族の軍団が、商人・工人・流民が、そして求法者や修行者が教えと共に数千年もの間、この街道を往来してきた。ドゥアウは、ヒンドゥークシ山中最大の宿場だった。

タジクの八十歳になる長老アリ・ババの一家は代々、各種サライ[3]とチャイハナを経営、しかし一族六十名中、往時を知るものは少ない。今日バーミヤーン近くで狩猟宿を営むザルディは、ババ五十歳の頃の子である。

今年の巡礼月、ババはマッカへ向った。心臓を病む当人をはじめ一族全員、今生の別れを覚悟した巡礼だった。人々はババがマッカに到り、一瞬でも聖地の空気を、と祈り、それが天に通じた。

ハジの尊称を得たババが帰郷、一族全員が祝宴に集る。廃墟同然に寂れていた町に、仮初の賑いである。この地の西の山には豊かな金鉱脈があり、バーミヤーンの大仏を覆っていた金箔を供給、と大昔からの伝説に尾鰭をつけたババの御当地自慢の復活が恐しい、町に被さる虹色の山で、岩脈は時代を映して色が変化、あのぶ厚い紅色は成吉思汗襲来のせい、等というのも困ったものだ、と人々は笑い合う。

坂の下方で七面鳥の声が響く。

ドゥアウ育ちの奴がこの国で一番、と誰も珍重しない七面鳥へのババの独り善がりを聞かされる筈、とザルディの表情が弛んだ。

（1）「二水合流点」の意。（2）「英雄ルスタムの弓」から「虹」の意。（3）中庭をもつ方形の「廓」状建築。宿泊、工房、取引等の名を冠する。例「キャラヴァン――」「トラック――」

●事務局長便り

＊中村医師の報告にあるように、現地では異常気象による渇水が続いています。私たちの事業地域では、取水システム・排水システムが共に機能して安定的な灌漑が行われているとのことで安堵しておりますが、アフガニスタン全土を考えると、旱魃の被害に多くの人びとが曝されているのではと危惧されます。また、ジャララバード市内は、パキスタンから押し戻された難民であふれているとのことで、始まったばかりのマルワリードⅡ（クナール河左岸）の事業も急がれております。これからの数年が、灌漑システム構築の正念場かと考えられます。日本側も肚を据えて支援に臨みたいと思います。

＊今年1年を振り返ると、熊本の大地震をはじめ、台風や洪水で日本国内も大変な自然災害に見舞われました。冬に向かう中、被害に遭われた方々それぞれに暮らしの立て直しに全力を上げられていることと存じます。一日も早く平穏な日々の戻ることをお祈りいたします。

＊ＮＨＫのＥＴＶ特集は、都合4回放映され、大きな反響を頂きましたが、私どもが企画しましたＤＶＤ「アフガニスタン　用水路が運ぶ恵みと平和」（本編・技術編　制作・日本電波ニュース　朗読・吉永小百合さん）も出来上がり販売を始めました。多くの方々に観ていただき、上映会など催していただければ幸いです。申し込みは、事務局にお願いいたします。頒価は3000円（税・送料込）です。

●ＰＭＳ支援室より

今年はＰＭＳの活動地で雨がたいへん少ない。ガンベリ沙漠のＰＭＳ農場作業の日報に気温と天気も記入してあるが、本当に少ない。現地との定時連絡時、事務職員のサーブル ジャンが神妙に「雨が降らず、空気が乾燥していて、病気になる人が増えている」と話す。日本と同様に寒波が押し寄せる今、今年大量に隣国より帰還した難民たちは干ばつのおさまらない中どのように寒さを凌いでいるのだろうか。

ペ村から――――――――――――♪

二〇〇〇年から十数年間のブランクを経て昨年やっと事務局に復帰できました。会の激動の時期を共にできなかった私ですが、昔と同じ仲間がいて昔と同じように温かく迎えてくれる幸せを感じています。気持ちを合わせることのできる新しい仲間に出会えたことも喜びです。今はＰＭＳ支援室で英語関連のお手伝いを少しだけしていますが、二五、六年も前にペシャワールのオフィスで短期ボランティアとして通関手続きや英語文書作成などに関わったことが、現地を想像するうえで少しは助けになっているかなと思います。（ＫＮ）

会　則

①本会の名称をペシャワール会とする。
②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な情宣・募金活動とともにワーカーの派遣を行うことを目的とする。
③本会は、思想・信条にとらわれず、「支え合い」の精神で一致して会を運営する。
④会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。
⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
⑥本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。
⑦本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。
⑧毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。
⑨本会の事務局をＦＡＲＡＨＯＵＳＥ（〒八一〇―〇〇二三　福岡市中央区警固二―一―一七　ハイツみかげ八〇三号　℡〇九二―七三一―二三七二）内におく。

総会、現地報告会は、原則として毎年六月第一土曜日に開催いたします。

発行所●ペシャワール会　〒810-0023　福岡市中央区警固2-1-17　ハイツみかげ803号（※2015年5月に移転しました）
電話092（731）2372　FAX　092（731）2373　郵便振替　01790−7−6559
発行日　2016年12月7日　No.130　会長　村上優　　現地代表　中村哲　　名誉会長　後藤哲也　　事務局長　福元満治